

祖父の思いを受け継いで

本田 将大さん

ぼくは被爆三世です。祖父が五才の時に長崎で被爆しました。祖父は、七十年経った今でも、当時のことを語ってくれようとはしません。よほどつらい記憶なのだと思います。

心の傷が七十年も癒えない戦争。平和のために、今ぼくができることは、戦争について知り、その悲惨さを伝えていくことだと思います。

ぼくの家では毎年夏休みになると、祖父の住む長崎に里帰りします。八月九日は、朝から教会の鐘がなり、平和記念公園には、白いテントが並び、多くの花が飾られます。

午前十一時二分、長崎中の教会の鐘が一斉になり、まち全体が黙祷します。僕たちも祖父の家から見える浦上天主堂に向かって黙祷をしています。でも、一年生の頃は どうして黙祷をしているのか、原爆って何だろう、被爆者って何だろうと思っていました。

四年生の夏。ぼくはこれまで疑問だった原爆のことについて調べようと思い、原爆資料館に出かけました。家族と祖父とで出かけたのですが、入り口で祖父は、「思い出したくない。」と言って中に入りませんでした。どんな思いで僕たちを待っていたのでしょうか。

確かに資料館には、その怖さを本当に実感する展示にあふれ、資料館に入りたくないという、祖父の気持ちが分かる気がしました。そんな資料館の中で、特に二つの展示が心に残りました。一つは十一時二分、原爆が落とされた時刻で止まっている古時計。ぼくには、長崎の人の時間が止まっているように感じられました。もう一つは、大きなきのこ雲です。投下直後のもので、その大きさから、原爆の力と、その下にいた祖父たちのことを思うとたまりませんでした。

その日以来、ぼくは、原爆を二度と繰り返してはいけない、戦争をしてはいけないということを伝えていきたいと考えています。平和の大切さを伝えていくことが、祖父の思いをつなぎ、今もって語ることをしない祖父の心を和らげていくことになると思っています。

今年の夏、祖父に、あらためて、ぼくの今の思いを伝え、八月九日のことを聞いてこようと思っています。